

英語教育における音楽教材の活用

——音楽と異文化トピックを組み合わせた
総合教材『ポップスで学ぶ総合英語』の開発——

角 山 照 彦

Use of Music and Song in the Teaching of English

——The development of a song-based textbook “English with Hit Songs”——

Teruhiko Kadoyama

広島文教女子大学紀要（第36巻） 抜刷

2001年12月25日

英語教育における音楽教材の活用

—音楽と異文化トピックを組み合わせた
総合教材『ポップスで学ぶ総合英語』の開発—

角 山 照 彦

Use of Music and Song in the Teaching of English

—The development of a song-based textbook “English with Hit Songs”—

Teruhiko Kadoyama

1. はじめに

英語教育においてポップスなどの音楽を教材として活用するという試みは、古くから広く実践されている。英語の歌を歌うことによって授業が活性化した等、これまでも多くの実践報告が中学校、高校を中心にされている。^{注1}近年大学の英語教育においても多くの実践報告や研究が行われており、音楽教材が学生の動機付けに役立ったなど、英語の歌は学習者には概ね好意的に受け入れられている（例えば、Grant, Clark & Koch, 1996; Laskowski, 1995 など）。実際、現在本学で学ぶ学生の中にも中学校や高校の英語授業において、Beatles や Carpenters などの音楽を歌ったり、歌を聞いて歌詞の中の空欄を埋めるといった演習をしたことがあると答えたものが多くいる。

しかし、これほど広く活用されているにもかかわらず、依然として英語の歌の教材としての価値は、現場教員に十分認識されているとは言えないようである。実際の活用法としては、授業の雰囲気作りであったり、授業中の息抜きであったり、いわゆる時間に余裕がある場合のゲーム的な使われ方しかされていない場合も多いようである (Kanel & Grant, 1993)。現在でも英語の歌というと、楽しく歌おうといった側面ばかりが強調され、英語ゲームなどと同等に扱われる傾向がある。また、どうしても歌うという側面が強調されてしまうため、関心はあってもなかなか授業で歌を使うことを躊躇してしまう教師も現実には存在する (Murphey, 1992)。Hino (1988) は、音楽教材の有用性を述べる中で、音楽が英語教育においてカリキュラムの軸の一つとなる可能性さえ指摘しているが、10年以上経過した現在も、残念ながら状況は大きく改善されたとは言えない。

英語の歌が学生にとって親しみやすく、動機付けに役立つとはよく指摘される場所であるが、そうした面だけに留まらず、実際英語の歌は、authentic な言語素材として、通常の教材に劣らない、いやそれ以上の効果を上げる可能性を秘めていると筆者は考えている。Medina (1993) が力説するように、歌はいつまでも教育的価値のない、単なるレクリエーションのための道具と見なされてはいけぬのである。

本稿では、これまでの英語教育における音楽の活用法とその利点及び問題点を検討し、現在のこうした状況の背景にある原因の分析を試みる。さらに、現状を改善するための現実的な方策の一つとして試みた英語の歌をベースとした総合教材『ポップスで学ぶ総合英語 (English

with Hit Songs)』の開発に触れ、その基本理念を提示する。

2. 活用法と利点、問題点

2-1. 具体的な活用法

では、英語の歌は実際に授業ではどのように活用されているのであろうか。前述の通り、英語の歌は授業において幅広く活用されてきており、活用法は実に様々であるが、浅川他(1997)は、その活用法を次の8つに分類している。

1. 授業の雰囲気づくり
2. 語彙や文法事項の導入、定着
3. 替え歌づくり(英作文)
4. 歌詞の聞き取り(穴埋め)
5. 音読
6. 訳詞づくり
7. 英詩として歌詞を味わう
8. 歌詞を読みとり教材として扱う

項目1に挙げられた「授業の雰囲気づくり」とは、授業の開始や終了時に英語の歌を聞かせて、学生の英語への関心を高めるといった活用法を指している。

項目2の「語彙と文法事項の導入、定着」としての活用法は、仮定法、現在完了形など具体的な文法事項の導入や定着のために歌詞を活用するというもので、多くの実践報告がある(例えば、Abrate, 1983; Dubin, 1974; Jolly, 1975; Martin, 1989; Urbancic & Vixmuller, 1981)。

項目3の替え歌作りは、歌詞の一部を活用した英作文の演習の延長線上にあるものとして捉えることが出来よう。また、writingの授業における実践例としては、Gaunt(1989)がある。

分類項目4に挙げられた「歌詞の聞き取り」とは、listeningの演習としての活用法を指しているが、具体的にはこれは2つに分けることが出来よう。一つは、「歌を聞いて歌詞の中の空欄を埋める」という形式のcloze exerciseで、音声を正確に聞き分けるlistening discriminationを目的としたものである。これは歌の活用法としてはおそらく最も広く行われているものであろう。Kanel(1996)やKanel & Grant(1993)を始めとする多くの実践報告があり、英語の歌を使ったcloze exerciseが通常のlistening教材と同等以上の効果があったことを報告している。また、同様の演習としては他にも、「歌詞の中に挿入された間違っただ単語を聞き取って訂正させる」というpassage correction quizの活用が報告されている(Kanel, 1996)。

もう一点は、歌の大意を聞き取るというlistening comprehensionを目的とした活用法で、Grant, Clark & Koch(1996)などの実践報告がある。

項目5の音読も、英語独特のリズムを習得させるという目的で広く行われている。授業中に歌うという活動もこの中に含まれるであろう。

項目6の訳詞づくりとしては、Zola & Sandvoss(1976)が上級者向けの活動として報告している。

項目7の「英詩として歌詞を味わう」に関しては、例えば、McLean(1983)はBob DylanやBruce Springsteen, Paul Simonなどの歌詞は、詩としての鑑賞に堪えうる作品だとしており、Gelman(1973)も、音韻や比喩表現、擬人法など、歌詞を英詩として味わう活用法を提案している。

項目8の読解教材としての活用に関して、例えば浅川他(1997)では、英語の歌自体を読解教材として扱うという手法と国際理解教育の視点との間に接点を認め、平和・人権・環境問題など、社会的メッセージの強い歌を題材に取り上げることにより、学生の時事問題への関心が高まったことが報告されている。

これらの活用法は、それぞれ単独で行われる場合もあるだろうが、組み合わせて行われる場合もあるだろう。例えば、Hino(1988)は、授業における具体的な指導過程として8つの手順を提示しているが、この中には、リスニングによる cloze exercise、文法・表現の解説、歌詞の内容に関するディスカッションなどが含まれている。また、Murphey(1992)やGriffiee(1992)などの resource book では、上記以外の様々な活用法が取り上げられており、Laskowski(1995)も4技能にまたがる様々な活用法を提案している。

筆者はこれまで過去10年間、毎年学年始めに学生に対して、中学や高校の英語授業で英語の歌を使って学習した経験の有無を調査しているが、その結果約8割の学生があったと答えている。その活用法のうち最も多いのが、ただ聞いたり、ミュージック・ビデオを見ただけというもので、それに続くのが cloze exercise であった。前述の活用法としては、項目1や4ということになる。扱われた曲は、Beatles (“Let it be,” “Yesterday,” “Hey, Jude” など)、Carpenters (“Close to you,” “We’ve only just begun,” “Top of the world” など)、John Lennon (“Imagine” など)が圧倒的多数を占めていた。これらは学生に対する調査であり、教員に対する調査ではないため、その活用法や意図まで十分に反映するものではないが、様々な実践報告で紹介されている活用法が、現場レベルではまだ十分浸透しているとは残念ながら現段階では言えないと思われる。

2-2. 教材としての利点と問題点

次に、英語の歌を教材として活用することに対する利点、及び問題点について考察してみよう。まず、利点としては、多くの先行研究において、学習者の動機付け、学習態度に大きな効果があったことが指摘されている。例えば、Laskowski(1995)では、音楽は学生にとって親しみやすいもので、これまで聞いたことがある歌の意味が正確に理解出来たことにより、学生の動機付けに大きな効果があったことが報告されている。外国語学習における動機付けの重要性を考えると、これは極めて大きな利点と言える。

また、音楽には学習者の緊張を緩和する効果があることも、Murphey(1992)やGriffiee(1992)をはじめとして多くの研究により指摘されている。前述の授業の雰囲気作りといった活用法は、歌のこうした特徴に着目したものであろう。学習者の心身の緊張を解くことが外国語学習には重要であるという考え(Guiora *et al.*, 1972)が、近年の外国語教授法の多くに大きな影響を与えていることを考慮すると、これも非常に大きな利点と考えられよう。加えて、音楽には歌詞の意味が十分理解出来なくとも楽しむことが可能だという側面があり、特に slow learner には受け入れられやすいであろう。

上記の3点に加え、Hino(1988)は次の3点を指摘している。

- ・英語のリズムの習得
- ・文化的価値（歌詞はその作者の属する文化を投影するもので、国際コミュニケーションに不可欠な異文化理解を促進するために好適な材料である。）
- ・今日的な言語材料（現代の洋楽の歌詞は、現実の言語使用の事実を反映した実用的な英語素材である。）

さらに、映画などの他の authentic な素材と比較した場合、歌は比較的短く、しかも自己完結

しているため、授業において扱いやすいという利点も挙げられるだろう。このことは映画の一場面だけを授業で使用する際の扱いにくさを考えれば明らかであろう。

一方、音楽教材に対する批判として、Murphey (1992, 8-9) は、語学教師を対象とした調査で、音楽を教材として使う場合の弊害として 20 の問題点を指摘しているが、音響設備の不備を始めとする設備面での問題点等を除くと、問題点としては、

- 俗語が多く、文法規則が守られていない。
- 歌詞の内容が分りにくいものが多い。
- 歌うことが苦手な教員がいる。
- 学生は歌いたがらない。

など、日本の教育現場でもよく耳にするものばかりである。

このうち、俗語や文法的に破格の表現が多いという批判に対して、Murphey (1990) は、1987 年 9 月のヒットチャート上位 50 曲の歌詞を分析した結果、代名詞を中心に易しい語彙が繰り返して使用され、不自然な文法、卑俗な語彙はあまり含まれていないことを実証している。

また、歌詞の内容面に対する批判についても、確かに的を射ている面もあるが、これはすべて教材選択の問題に帰するのではないであろうか。こうした類の批判は、あらかじめ教材用に作成されたものを使用するのではなく、新聞や雑誌の記事など、おおよそ authentic な素材を教材として活用しようとする場合教師が必ず直面するものであり、教師の側の適切な教材選択で十分に解決する問題であろうと思われる。

授業中に「歌う」ということに対する教員、学生の消極的な態度に関しては、「歌う」という活動そのものが歌の活用法として必要不可欠なわけではなく、listening を主体とした「歌わない」アプローチの仕方も数多く存在することを考慮すると、特に問題点とは言えないのではないだろうか。こうした批判は、これまで英語の歌というと、「楽しく歌う」という点ばかりがクローズアップされてきた弊害であろう。

上記の指摘の他、Murphey (1992) では、特に多くの教員から指摘された問題点として、

1. 学校側、教師、学生が音楽や歌を軽く扱ってしまう。
(Administrators/ teachers/ students do not take music and song seriously.)
2. 歌の使用は、シラバスから外れることになり、授業時間が失われることになる。
(It takes away from the normal syllabus. Time is lost.)
3. 何を目的として、どのように活用したらよいか分からない。
(How do you exploit the material usefully? What is the goal?)

の 3 点を挙げているが、まさしくこの中に問題点のすべてが集約されているのではないかと思われる。すなわち、英語の歌は、まだ多くの現場教員にとっては、単なる授業の合間の息抜きや、学生の関心を引くためのゲームの類としてしか認知されていないのではないだろうか。

したがって、歌を使って何をどのように教えたらよいか、という問題に十分応えることが、最も必要とされるのである。

3. 問題とその解決策

前節で英語教育における音楽の活用の利点及び問題点について考察してきたが、問題点として指摘された点のうち、卑語や俗語が多いなどといった歌詞自体に起因する批判は、必ずしも当たってはいないし、また、教員による適切な教材選択の眼をもってすれば、実際問題として

はあまり大きな障害とはならないように思われる。むしろ、障害となっているのは、「何を目的として、どのようにして活用したらよいか分からない」という意見に象徴されるように、英語の歌の教材としての活用法が教員にまだ十分浸透していないことであろう。「歌の使用は通常のシラバスから外れることになり、授業時間が失われる」といった指摘も、シラバスの中に英語の歌を組み込む方法が十理解されていないことに起因するものである。

では、なぜこうした状況が生まれたのであろうか。前述の通り、歌の活用に関する実践報告はこれまでも多くなされているが、授業に歌を導入することによって授業が活気づいた、学生の動機付けに効果があったとする報告が主で、具体的な指導過程として授業指導案を提示したものは見られるものの（例えば、Hino, 1988; Kanel, 1996 など）、シラバス全体に踏み込んだものはほとんどないと言ってよい。

また、Laskowski (1995) では、歌のテーマに沿った様々な演習が紹介されているが、その有効性は認めるものの、実際にこれを一年間通して実践しようとする、教員の側で英語の歌に関するかなり専門的な知識がなければ、適切な楽曲を選択することは非常に難しいと思われる。

さらに、実践報告の多くも、例えば、Simon & Garfunkel の“El Condor Pasa”という曲が仮定法の導入に優れている (Elson & Fox, 1983) など、特定の歌のみを取り上げてその教材としての有用性を述べるに留まり、一般性に欠けているものが多いと言わざるを得ない (DeSelms, 1983; Griffie, 1986; McLean, 1983 など)。

このように、断片的な授業アイデアは数多く報告されているものの、全体的なシラバスに結び付くものがまだ確立されていないのではないだろうか。つまり、点は多くあっても、それを年間の指導計画の軸として組み立ててゆくだけの線に当たるものがまだ十分提示をされていないのである。このような様々な要因が複雑に絡まって現在のような状況になっていると思われる。

こうした現状の具体的な解決策の一つは、教員側に音楽に対する専門知識がそれ程なくても使えるような音楽をベースとした教材を開発し、実際の活用法として提示することであろう。大学用英語教科書を例にとると、毎年おびただしい数の新刊教科書が各出版社から発売されているにも関わらず、資料 1 にもあるように英語の歌を扱ったものは、これまでに 10 数点と非常に少ないことがわかる。これには、音楽を扱った教科書を作成しようとした場合、歌詞の掲載やオリジナル・アーティストによる音源使用等に関わる著作権関連の手続きの問題をはじめとして出版社側の様々な要因もあるのだが、現在英語教科書として出版されている数だけを考えてみても、まだまだ未開拓の分野であり、教員の歌に対する認識を大きく変えるだけの教材がこれまで提示されてこなかったのではないだろうか。

さらに、前述の通り、歌を活用して何をどのように教えるかを教員に明確に提示出来ることが必要であるが、先行研究には、英語の歌の教材としての有効性を強調しようとするあまりか、歌だけですべての language skills を習得させることが可能だとする研究が目立つ (Kanel, 1996; Murphey, 1990 など)。また、授業における具体的な指導過程を提示した報告にも、授業時間全てを歌を使った活動に当てていると考えられるものがある (Hino, 1988 など)。しかし、現実問題として一年間通して歌だけを教材に授業を展開するという考えに同調出来る教員がどれだけいるだろうか。例えば、reading の指導について考えた場合、前述の歌詞を読解教材として扱うというアプローチの意図は十分理解出来るものの、一般的な歌詞の分量を考慮すると、量的に十分とは言えないだろう。これを補うものとして、多くの教科書で、歌やアーティストに関する文章を読解教材として与えているが、この点については、大学における英語教育を念頭においた場合、内容面で疑問を感じざるを得ない。国際化時代に生きる大学生に教員が読んで欲

しいと考える題材としては、いわゆる showbiz 的なものだけでなく、もっと幅広い異文化理解につながる内容のものではないだろうか。listening の指導についても同様である。既存の教科書の中で聞き取り演習の素材として歌以外を扱っているのは2点のみであり、その内1点も歌と同様の cloze exercise である。基本的に monologue の形態をとる歌だけでなく、dialogue や announcement など、実際のコミュニケーションの場面に即した様々な素材も学生に聞き取り演習として与えたいと考える教員が多いのではないだろうか。こうした点で、歌をベースにした既存教科書と教員のニーズとの間にズレが生じていると考えられる。

すなわち、現実的な方策としては、歌で全ての技能を指導しようとするより、むしろ歌は決してオールマイティな素材ではないという認識に基づき、如何に歌を年間の授業計画の中に効果的に取り込んでゆく方法を考えてゆくべきではないだろうか。

4. 『ポップスで学ぶ総合英語』の理念

前節までの考察に基づき、筆者が共同開発した大学英語教科書『ポップスで学ぶ総合英語 (English with Hit Songs)』は、現在の大学における英語、特に教養課程の一部として行われる一般英語授業での使用を想定している。

内容を検討するにあたっては、まず基礎教養科目としての英語に教員が望んでいることを把握する目的で、県内10大学の講義概要を調査した。その結果、キーワードとして浮かび上がってきたのは、基礎的な英語力の定着、4技能 (reading, writing, listening, speaking) の向上、コミュニケーション能力の養成、異文化理解、国際化の5つであった。これらのキーワードを検討した結果、本テキストの形式としては4技能をバランスよく扱った総合教材とし、内容面では、国際化時代に不可欠な異文化理解につながる題材を取り上げ、基礎学力の定着につながるレベルのものとするにことにした。

この枠組みの中で英語の歌をどのように活用するかを検討していった結果、本テキストでは、authentic な素材である歌の特徴を最大限に生かし、音の弱化、同化、脱落、連結などといった自然な発話で生じる様々な音声変化や英語のリズムを習得するための題材として歌を活用することとした。こうした活用法は、Kumai & Timson (1998, 1999) で既に提案されており、また、独習書の形態ではあるが、角山 (2001) でも、脱落、連結、同化、弱化などの音声変化の法則を12の Listening Point としてまとめ、ヒット曲を聴きながらこれらを習得するという活用法を提案している。

具体的な演習方法としては、歌を使った listening discrimination のための cloze exercise を中心にしており、その後に音声変化のポイント (Listening Point) に関する解説、および例文と補充問題を配置している。曲を聞いて歌詞の中の空欄に当てはまる単語を書き入れるという cloze exercise は、前述の通りこれまでも一般的に活用されてきているが、本テキストでは、単なる単語の聞き取り演習とするのではなく、各課毎にポイントとなる音声変化 (同化など) の表れている箇所を cloze として選定し、自然な英語の発話において頻繁に表れる音声変化を習得するという演習の目的を明確化するよう配慮している。また、この歌を使った演習は各課の最初に配置しているが、これは授業の雰囲気作り等の効果を狙ってのことである。

取り上げる楽曲の選定に関しては、学生にとって馴染みのあるポップスということで検討を始めた。これはこれまで発売されている教科書の大半がオールディーズ中心で構成されており、学生のニーズよりむしろ教員のよく知っている曲という観点から選曲されていると考えられる

からである。筆者はいわゆるオールディーズの活用を否定するわけではないが、学習者中心の授業という観点からも教材選択にもう少し学生の視点を取り入れるべきではないかと考える。

しかし、検討を進めてゆく上で大きな障害があった。それはオリジナル音源の確保という問題である。アーティスト側の許可が下りないため、オリジナル・アーティストによる音源を教科書に付加することは、通常ほぼ不可能である。そのため、既発のテキストでは、多くの場合ネイティブによる吹き込み音源を添付する形をとっているが、残念ながら楽曲の魅力を十分伝えきれているものはほとんどないと言ってよい。本テキストでは、オリジナル・アーティストによる音源の使用という点にこだわり、この問題の解決策として、市販のコンピレーション CD を活用するという方法をとった。^{注2} コンピレーション CD には1枚の CD の中に様々なアーティストの曲が含まれており、また、既に市販されている CD を活用することにより出版社側で独自の音源を作る必要がなくなり、発売元のレコード会社との交渉次第でオリジナル音源使用の問題をクリアすることが可能となった。

現在発売されているコンピレーション CD に含まれている楽曲を詳細に検討した結果、(株)ソニー・ミュージックエンタテインメント (SME) から発売されているアルバム“MAX BEST”を活用することとした。この CD は“MAX”という同社のコンピレーション CD シリーズのベスト盤として昨年末発売されベストセラーとなったもので、TV、映画などで使用されたヒット曲が新旧取り混ぜて収録されており、学生だけでなく教員にも馴染みが深いであろうと考えられたからである。

本テキストのもう一つの大きな柱は、歌と異文化トピックとの融合である。そのため、歌の内容やアーティストに関連した異文化トピックを題材とした400語程度のエッセイを読解教材として作成し、歌と読解演習との間に関連性を持たせるように配慮した。

本テキストは全12課から構成されているが、各課で取り上げている歌、及び Listening Point、そしてそれに関連した Reading Topic は次ページの図1の通りである。

例えば、第5課では、リスニングの演習として Ricky Martin の“Livin' La Vida Loca”というヒット曲を素材に、子音の連続による脱落という音声変化を学ぶようになっているが、読解演習としては、現在アメリカで活躍する彼がプエルトリコ出身のいわゆるヒスパニックであることに着目し、現在のアメリカにおけるヒスパニックの目覚ましい進出を扱った400語程度のエッセイを用意している。サンプルとして資料2に本テキストの第5課の全文を掲載している。

また、第9課では、Des'ree の“Life”という歌を取り上げ、リスニング演習としては [a] [a:] [æ] [ʌ] [ə] [ə:r] [ər] など日本語の「ア」や「アー」に近い母音の識別に焦点を当てており、読解演習では、歌詞の中で迷信に関する言及が多いことから欧米の迷信に関するエッセイを用意するなど、歌と読解教材との間に何らかの関連性があるように構成されている。

さらに、歌を使った cloze exercise は基本的には音声を正確に聞き取るという listening discrimination の演習であるため、音声を正確に聞き取る能力と大意を掴む能力とをバランスよく養成するという観点から、この他にも TOEIC の Part Ⅲ の形式によるリスニング問題を作成した。これは、対話の大意を聞き取るという listening comprehension の向上を目的とした演習で、内容的には必ずしも歌と直接の関連性は持たせていない。むしろ、病院、学校、職場での会話など、様々なコミュニケーションの場面を取り上げるよう配慮している。

以上が、各課の基本的な構成であるが、実際の授業における基本的な流れとしては、次ページの図2のような3つのステップになる。

Unit	Song Title	Listening Point	Reading Topic
1	My Heart Will Go On Celine Dion	音の連結①	A Clearly Canadian Identity (カナダケベック州の状況)
2	Open Arms Journey	音の脱落① (ing ⇒ in')	Wedding Customs (結婚に関する習慣の由来等)
3	Don't Look Back In Anger Oasis	音の同化	Britain's Rock'n'roll Royal Family? (イギリス王室について)
4	A Whole New World Peabo Bryson	音の脱落② (破裂音)	A Whole New World (ディズニー映画とステレオタイプ)
5	Livin' La Vida Loca Ricky Martin	音の脱落③ (子音の連続)	The Changing Face of America (変貌しつつあるアメリカ社会)
6	Kiss Of Life Sade	短縮形の音① (must've been)	The Face of Britain (イギリスの人種構成)
7	I Don't Want To Miss A Thing Aerosmith	音声変化の複合 (wanna)	Hollywoodland? (映画の都ハリウッドの歴史)
8	Every Time I Close My Eyes Babyface	音の脱落④ (母音脱落, 曖昧母音)	What's in a Name? (名前に隠された様々なエピソード)
9	Life Des'ree	注意すべき母音 ([a:] [æ] [v] [e] [e:r] [er])	Superstitions (欧米の迷信とその由来)
10	The Stranger Billy Joel	音の弱化 (機能語の発音)	Masks (様々な文化における仮面の役割)
11	All I Want For Christmas Is You Mariah Carey	短縮形の音② (want と won't)	Christmas Traditions (クリスマスの習慣とその由来)
12	Hey Now Cyndi Lauper	音の連結② (子音と [j] の繋がり)	Do Girls (and Women) Just Want to Have Fun? (女性の求める男性像)

図 1.



図 2.

5. 終わりに

今回共同開発したテキスト『ポップスで学ぶ総合英語』では、「歌と異文化トピックを組み合わせた総合教材」という基本コンセプトのもと、歌の cloze exercise に音声変化の法則を学ぶという明確な目的を持たせるといった点に特に配慮した。これによって、シラバスの流れの中で歌の活用法とその目的を明確に位置付けることが可能になったのではないかと思う。しかしながら、歌の活用法をこれだけに限定する意図ではなく、歌詞の読解、鑑賞をはじめ、活用法の項目で取り上げた様々な活用法は、教授用指導書に記載し、現場教員のニーズによって適宜取捨選択してもらおうという立場を取っている。

また、本テキストは listening と reading が中心となっており、speaking と writing に関わる演習を特に設けていないが、これは、まだ少人数制の授業が十分確立されていない現状を考慮したものであり、これも必要に応じて指導書に記載された演習を取り入れてもらうという方針によるものである。

こうした本テキストの目的が十分達成されているかどうかは、実際に授業で使用した現場教員からの率直なフィードバックを待つ次第である。楽曲の選定に関しては、文法項目に沿ったものや、平和、人権など社会的テーマに沿ったものなど、様々なアプローチの仕方が考えられるが、今回は学生、教員共に馴染みのある楽曲とオリジナル音源の確保という2点に重点を置いた。既に市販されている1枚のCDの中からの楽曲選定という条件や著作権上の制約から、本テキストの開発は難航を極めたが、学生にとって馴染みのある楽曲がオリジナル音源のまま授業で使用可能という点においては新しい方法を提示できたのではないかと思う。

およそ全ての学習はまず動機付けから始まると言われ、効果的な学習には動機付けが前提となっている。学生が関心を示す素材を教員は積極的に教材として活用するべきであろう。そうした意味でも授業における歌の積極的な活用は望まれるところであるが、今後もっと多くの教員に活用してもらうためには、断片的な授業アイデアの提示に留まらず、教員がシラバスの中に取り入れやすい形で提示してゆくことが必要であろう。

歌の活用に関して、いつまでも楽しい、面白いばかりが強調され過ぎてはいけぬのである。また、いつまでも一部の音楽好きの教員の利用だけに留まっていたはいけぬのである。英語の歌は、authentic な言語材料として大きな可能性を秘めており、Hino (1988) が述べたように、カリキュラムの軸となることも十分可能なのである。

注

- 1 例えば、三友社発売の雑誌『新英語教育』には、1980年より英語の歌を活用した実践報告が数多く掲載されているが、1994年4月号からは「授業に歌を」という連載記事で毎月紹介されている。
- 2 資料1の中の②⑤⑩においてもオリジナル音源のCDが活用されている。

参 考 文 献

- Abrate, J.H. (1983) Pedagogical applications of the French popular song in the foreign language classroom. *Modern Language Journal*, 6(1), 8-11.
- DeSelms, C. (1983) Music to learn by. *JALT Newsletter*, 7(4), 6-7.
- Dubin, F. (1974) Pop, rock and folk music: An overlooked resource. *English Teaching Forum*, 12(3), 1-5.
- Elson, N. & Fox, J. (1983) Music in ESL. *TESOL Talk*, 14(1&2), 180-185.
- Gaunt, J. (1989) The use of popular music in the writing class. *The Language Teacher*, 13(5), 11-13.
- Gelman, M. (1973) Poetry and songs in the teaching of languages. *Babel*, 9(1), 13-15.
- Grant, P.B., Clark, C. & Koch, T. (1996) Listening comprehension through songs in the English language classroom: A comparison of cloze and question exercises. *The research Journal of the Department of Teacher Education, Kinki University*, 7(2), 77-96.
- Griffee, D.T. (1986) Song activities. *The Language Teacher*, 10(10), 18-19.
- Griffee, D.T. (1992) *Songs in action*. London: Prentice Hall International.
- Guiora, A.Z. et al. (1972) The effects of experimentally induced changes in ego states on pronunciation ability in second language: an exploratory study. *Comprehensive Psychiatry* No.13.
- Hino, N. (1988) The use of music in the teaching of English: a suggested teaching procedure and its theoretical basis. *The Journal of Tokyo International University: The Department of Commerce*, 37, 101-112.
- Jolly, Y.S. (1975) The use of songs in teaching foreign languages. *Modern Language Journal*, 59(1), 11-14.
- Kanel, K. & Grant, P. (1993) Teaching college English through songs. *The Research Journal of the Department of Teacher Education, Kinki University*, 4(2), 63-93.

- Kanel, K. (1996) Teaching with Music: Song-based tasks in the EFL classroom. In Fotos, S. (ed.), *Multimedia Language Teaching*, 114–148. Tokyo: Logos International.
- Kumai, N. & Timson, S. (1998) *Hit Parade Listening*. Tokyo: Macmillan Languagehouse Ltd.,
- Kumai, N. & Timson, S. (1999) *Hot Beat Listening Book 1 & 2*. Tokyo: Macmillan Languagehouse Ltd.,
- Laskowski, T. (1995) Using songs in the classroom: Enhancing their educational value. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 6, 53–61.
- Martin, D.F. (1989) Teaching grammatical ties through popular music. *The Language Teacher*, 13(5), 13–14.
- McLean, A.C. (1983) Rock as literature: Springsteen's "The River." *English Teaching Forum*, 21(3), 43–45.
- Medina, S.L. (1993) The effect of music on second language vocabulary acquisition. *FLES News: National Network for Early Language Learning*, 6(3), 6–8. (ERIC Document No. ED352-834)
- Murphey, T. (1990) *Song and music in language learning: An analysis of pop song lyrics and the use of music and song in teaching English to speakers of other languages*. Bern, Switzerland: Peter Lang.
- Murphey, T. (1992) *Music & Song*. Oxford: Oxford University Press.
- Urbancic, A. & Vixmuller, J. (1981) Using popular music in the foreign language classroom. *The Canadian Modern Language Review*, 38(1), 81–87.
- Zola, M. & Sandvoss, J. (1976) Song in second language teaching: The use of imagery. *The Canadian Modern Language Review*, 33(1), 73–85.
- 浅川和也他 (1997) 『英語教育における国際理解教育の事例Ⅱ—メッセージのある英語の歌を使って—』 大学英語教育学会第36回大会 (於早稲田大学) 発表資料
- 角山照彦 (2001) 『LOVE SONG で学ぶ英語リスニング』 岡山: 西日本法規出版
- 角山照彦 & Capper, S. (2001 印刷中) 『ポップスで学ぶ総合英語 (English with Hit Songs—featuring the "MAX BEST" CD compilation—)』 東京: 成美堂

資料 1

これまでに発売されたポップスを題材とした大学用主要英語テキスト

- ① 『イングリッシュ・ウィズ・ポップス/ English with Popular Songs』 土屋唯之, 英潮社, 1997年。
- ② 『映画音楽で楽しむ総合英語/ The Greatest Movie Songs』 津田敦子, 金星堂, 2000年。
- ③ 『エンジョイ・ポップソング/ Enjoy Pop Songs』 Kim R. Kanel, 成美堂, 1997年。
- ④ 『カーペンターズで学ぶ英語/ The Carpenters 22 Hits』 James House, 成美堂, 1998年。
- ⑤ 『スクリーンミュージックで学ぶ英語/ Screen Vocal Listening』 前川利弘/Craig Dermer, 金星堂, 1999年。
- ⑥ 『世界のヒット音楽 12/ 12 Great Hit Songs』 染矢正一他2名, 英宝社, 2000年。
- ⑦ 『総合英語/ 思い出のあの映画音楽/ Screen English/ Sing! Sing! Sing! vol. 1&2』 渡辺幸俊他5名, 蒼洋出版, 1996年。
- ⑧ 『ヒットソング・リスニング/ Hit Song Listening』 Kim R. Kanel, 成美堂, 1999年。
- ⑨ 『ヒットパレード・リスニング/ Hit Parade Listening』 Kumai, N. & Timson, S., 1998年, マクミラン・ランゲージハウス。
- ⑩ 『ビートルズの世界/ A Modern Way to Learn English through the Songs of the Beatles』 Mosdell, C., 金星堂, 1984年。
- ⑪ 『ベスト・オヴ・グラミー/ The Best of Grammy Winners』 津田敦子, 金星堂, 2000年。
- ⑫ 『ホットビート・リスニング/ Hot Beat Listening Book 1 & 2』 Kumai, N. & Timson, S., 1999年, マクミラン・ランゲージハウス。
- ⑬ 『ポップス英語演習/ Say It In Song』 James House/Jeffery Manning, 1992年, マクミラン・ランゲージハウス。
- ⑭ 『ポップソング・リスニング/ Pop Song Listening』 Kim R. Kanel, 成美堂, 1995年。
- ⑮ 『若き魂の叫び/ Cries of Young Souls』 大杉正明他2名, 朝日出版社, 1990年。

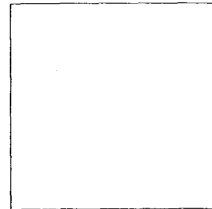
資料 2

『ポップスで学ぶ総合英語』第5課

Ricky Martin

1999年夏、全世界をラテンブームに巻き込むきっかけとなったリッキー・マーティンの大ヒット曲であり、全米チャートでも初登場第1位という快挙を成し遂げています。

この曲は、響ひろみが『Goldfinger 99』としてカバーしたこともあって、日本でもヒットしました。「アッチッチー」というフレーズは流行語となったので、耳にしたことがある人も多いと思いますが、実際の英語では何と歌っているのでしょうか？



収録アルバム：Ricky Martin
ESCAR017



Let's Listen!

Listen and fill in the blanks.

She's into superstitions
I feel a premonition
She's into new sensations
New kicks in the candlelight**
She's got a new addiction
For every day and night
* She'll make you take your clothes off
And go dancing in the rain
She'll make you live her crazy life
But she'll take away your pain
Like a bullet to your brain
** Repeat
She's livin' la vida loca
She'll and you down
Livin' la vida loca
Her are devil red
And her skin's the color of mocha
She will you:
Livin' la vida loca
Livin' la vida loca
She's livin' la vida loca
Woke up in New York City
In a funky cheap hotel
She took my heart
And she took my
She must've slipped me a

She never drinks the water
And makes you order French
Once you've had a taste of her
You'll never be the same
Yeah, she'll make you go insane

** Repeat
** Repeat
** Repeat

[Notes]
*She's into superstitions: She's enthusiastic about superstitions
**New kicks in the candlelight: She likes to have stimulating new experiences.

Did you know?

Livin' la vida locaとは?

Ricky MartinはPuerto Rico出身ですが、彼のようなHispanicがアメリカで増加するにつれ、スペイン語流りのタイトルも登場するようになってきました。Livin' la vida locaは、英語ではLivin' the crazy life! (vida = life, loca = crazy) となります。

彼は、10代を人気アイドルグループ、メヌードの一員として過ごし、日本にも来日しています。グループ解散後、1991年にまずスペイン語圏でデビュー。世界的なブレイクのきっかけになったのは、1998年にサッカーのワールドカップ公式テーマ曲『カップ・オブ・ライフ』が大ヒットで、『ゴー、ゴー、ゴー、アレ、アレ、アレ』というフレーズは世界中で流行しました。以後ヒット曲を連発し、現在世界で非常に注目されている男性アーティストの一人です。

Listening Point

Unit 4で綴り音について学びましたが、両音の綴り音が連続する場合は、同じ音が繰り返されるのではなく、前の音が発音されず、その音が聞こえにくくなります。

例えば、
first time は「ファースタイム」、
get together は「グットゥグザー」、
take care は「テイクケア」、
black cat は「ブラックキャット」
のように聞こえます。

また、これは両音の綴り音が続く場合だけでなく、[d]と[t]、[p]と[b]、[g]と[k]など、似た綴り音が続く場合も同様です。

例えば、
good time は「グットタイム」、
next door は「ネクストア」、
bad boy は「バッドボーイ」、
that girl は「ザッタガール」
のように聞こえます。

厳密に言うと、この現象は綴り音だけ起こるものではなく、同じ子音、又は発音の仕方の子音が連続する場合にはよく起こる現象です。

例えば、this seat という語のつなかりで[ts]の音が連続していますが、この音が2音節に入るのではなく、[s]の音が一度や二度めに発音されるだけです。ただ、綴り音の場合、「音の脱落」が一音はつきりしていると見えます。

Listening Point 5

両音の子音が似ている子音が続く場合、前の音は聞こえなくなる！

Examples

Listen and repeat the sentences.

- I'll take care of the matter.
- Let's get down to business.
- I had a very good time at the party.
- I'll have an orange juice.
- The girl is very attractive.

36

Let's Read!

Ricky Martin はプエルトリコ出身ですが、彼のようにアメリカに住むスペイン系の人々は Hispanic と呼ばれます。現在アメリカでは Hispanic の数が急激に増えつつあり、アメリカの人種構成にも大きな変化が現れるようになってきました。今回はこうしたアメリカの変化についてのパッセージを読んでみましょう。

The Changing Face of America

In modern day America, people often talk of 'minority groups.' The term usually refers to racial or ethnic groups, but may also be used more widely, for example, for groups identified by their religious beliefs or sexuality. But changes in American society suggest that in the future the way we understand 'minority' may have to be revised. Recent population studies suggest that by 2070, 'minorities' will have become the 'majority.'

Take, for example, the influence of the Hispanic population, which has greatly increased in recent years, particularly in California. In 1970, the population of California was 80 percent white, but by 2000 whites represented less than 50 percent. During the same period the Hispanic population rose to 32 percent. Experts believe that by 2040, whites will make up only 30 percent of Californians, and Hispanics will have a clear majority.

There are several reasons for the dramatic changes in California. Since 1980 the state has received 5 million immigrants, (including 2 million illegal immigrants), most of them from neighboring Mexico, and Central and Latin America. The religious beliefs of these immigrants and their traditionally large, extended families ensure that the Hispanic population grows much more rapidly than the white population.

And where California leads, other states will follow. Texas, New York, Illinois and Florida are not far behind. It is predicted that by 2070, America will have a non-white majority. California leads America in the number of interracial marriages too, and the other states will likely follow. Choices such as 'white, black, Asian or American Indian' (as the 1990 census asked people to choose from), are no longer enough.

The 2000 census offered a choice of 15 ethnic categories, but for the increasing numbers of multi-racial Americans, even that is not enough. The case of golfer Tiger Woods (part Thai, part Chinese, part African American, part white, part American Indian) is far from unique. Actor Keanu Reeves is part English, part Hawaiian and part Chinese. Singer Mariah Carey is part African-American, part Venezuelan and part Irish.

If this is confusing, one thing is clear. When the minorities become the

38

Check 1

Listen and fill in the blanks.

- We accept major () () my thoughts.
- I need some time to () () to Boston?
- Excuse me, but is this the () () some day.
- I want to make a () () at the party.
- The lady was wearing a () ()

Check 2

Listen and choose the best answer.

1. How long does the bus to City Hall take?

- 5 minutes
- 10 minutes
- 20 minutes
- 30 minutes

2. What are the speakers talking about?

- Going to a restaurant
- Moving to a big city
- Living in a foreign country
- Taking language classes

3. Where did this conversation probably take place?

- In a drugstore
- In a bank
- In a station
- In a taxi

4. What are the speakers talking about?

- The people upstairs
- A strange light
- An insect noise
- The source of the noise

5. How many years has the man been married?

- 6
- 10
- 20
- 25

37

5 Listen! La Vida Loca

majority, the old labels simply won't be enough, and how Americans see themselves will surely have to change.

Comprehension Questions

Circle the letter of the best answer.

1. Which of the following are not usually considered 'minorities' in the USA?

- religious groups
- ethnic groups
- racial groups
- pop groups

2. Recently, which ethnic group has grown most quickly in California?

- African-Americans
- Whites
- Hispanics
- Asians

3. By what year is a non-white majority predicted in the USA?

- 2000
- 2010
- 2040
- 2070

4. In the future, more Americans will consider themselves to be _____.

- Hispanic
- black
- multi-racial
- white

5. What is the central message of this passage?

- America is going to be a Hispanic country by 2070.
- Americans are proud of their multi-racial history.
- American society must change to accept new social realities.
- Five American states have non-white majorities.

39